

「ことだま」を探求する 安生 健

事物の性質のみに気をとられ、その名称に無関心で、事物の「ことだま」を意に介さないものが、理科好き人間には多い。これはまずいと「地質時代名称徹底追究事典」なるものを授業で配布し、名称の重要性を生徒たちに訴えている。つぎの問いかけはそのひとつ。

【質問】アンモナイト、ツタンカーメン、アンモニア、ビタミン、これらに共通するものは？

【解答】古代エジプトのAmon神。

【解説】Amon神とは、らせん状にまいたヒツジのようなツノをもつ半獣神。

アンモナイトはそのような形をしているので、西洋古典時代から^角cornū ^{アモン神の}ammōnisと呼ばれていた。その古来の名称からBruguèreが、1932年フ

ランス語でammoniteと命名したのだ。

エジプト第18王朝の王Tut-ankh-Atonは、BC1343年頃、伯父Ikh-n-Atonが信仰した一神教^{唯一神}Aton信仰を廃止、国教を多神教Amon信仰に戻し、Tut-ankh-^{アメン}Amenと改名した。

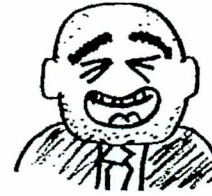
そのAmon神神殿沿道の植物から精製された物質は、ラテン語でSal ammōniacusと呼ばれ、薬品として使われていたが、二千年後の1774年、酸素の発見者のイギリス人Priestleyは、この塩化物精製時に発生する刺激性の気体を抽出し、歴史的呼称に因んでammoniaと命名した。

1910年鈴木梅太郎は、玄米から^{かっけ}脚気の特効薬を抽出し、ラテン語oryzaにもとづいてoryzaninと命名した。しかし1年後、この画期的新薬が海外に広く知られる前に、ポーランドのFunkが同一の物質を抽出し、^命vita (ラテン語)のamineの意味でvitamineと命名した。語源は、基本構造を同

じくするammoniaに由来する。これが現在のビタミンB₁だ。^{*}oryzaに^命vitaほどの力感がなかったのだろうか、日本人の発見が世界的共通名とならなかったのは大変残念に思う。

さて、ボク用の地学と生物の参考書として作成したこの事典も、版を重ねて第5版。7年間に都内の図書館などを利用して調べ上げた成果だ。生徒に語源探求の面白さを伝えたい、そしてボク自身の「ことだま」を探求したいという一心からの仕事だ。

(やすお・けん/学校法人巣鴨学園理科教諭)



筆者
(生徒の手による似顔絵)。

男冥利 村田泰隆

蝶とつき合って45年になる。昭和30年頃の日本は昆虫があふれていた。昆虫採集は、今のTVゲームと同じくらい少年たちの間で人気があった。私も例外ではなく、初めて採ったカラスアゲハに舞い上るほど感動し、友人の標本箱に整然と並んだ蝶に目を見張り、夏休みはいつも蝶を追っていた。そして、その気持ちをいまだに引きずって、夢と憧れをもち続け、感動は絶えることがない。

成虫の採集に始まった私と蝶とのつき合いは、時の経過とともに増えていった。中学・高校時代は、採集だけでなく卵や幼虫からの飼育を手が

け、庭は山野から採ってきた幼虫の食餌植物で賑わった。ここ15年ほどは野外での生態写真撮影に力を入れている。魚眼レンズを多用するのには、棲息環境と一緒に写し込むことで、環境保護の大切さを理解してもらいたいという気持ちもある。さらに10年ほど前から、蝶の化石調査も始めた。世界中の博物館の古生物学部門をまわり、化石の写真を撮り、文献収集している。蝶がいつ頃地球上に現れ、どのように分布を拡大したかを知りたいのだ。そして、ついには蝶のミトコンドリアDNAの分析結果の文献にまで目を通すようになった。楽しみが増え続けるのはじつは困ったことである。なにぶん本職もあるのだから。

写真は、今年3月に出版した蝶の写真集『飛ぶ宝石』(集英社)の著者紹介に使ったものである。

撮影は共著者の埼玉大学仏文教授奥本大三郎氏。ルーペで拡大すると右手中指に赤いクジャクチョウが止まっているのが見える。このひとコマを撮りながら奥本氏は「芸者をはべらせて」という説明をつけましょうよと言われた。日本産クジャクチョウの学名の亜種名は*geisha*である。美しい蝶たちに囲まれての趣味はまさに男冥利につきると思う。

(むらた・やすたか/株式会社村田製作所代表取締役社長)



クジャクチョウ
*geisha*と共に。

「ゲノム伝」をつくって 川端育夫

昨年6月にJT生命誌研究館のビデオブースに登場した「ゲノム伝～大胆に変化してきた38億年～」の構成・演出をさせていただき、本来抽象的なものである科学をいかに具象的に表現し、映像として定着させるかということに勉強しました。制作中は、ほとんどこの検討に明け暮れたといえます。中村桂子副館長から「昔話仕立て」という科学作品としては非常に斬新なアイデアが出され、これをどう料理すればいいのか大いに悩んだ末、「ゲノム伝」となりました。ゲノムが受け継がれてきた38億年を、伝習録に見立てたのです。

これが決まれば後は早いもの。大胆に変化し

てきた38億年の歴史を巻物に仕立てよう、説明フリップは食べ物など身近なものを使おう……すべてが順当に決まっていきました。この時点で、私の仕事はほぼ終わったようなものです。映像という芸事に携わる私は、今や文系思考そのもの人間ですが、子供の頃は理科大好き少年だったので、「ゲノム伝」はその双方を満足させてくれる素晴らしい仕事でした。

じつは、私の二人の子どもへの周囲の評価は、「鶯が鷹を産む」と「蛙の子は蛙」。鷹はよいのですが、いつまでも心配なのが蛙です。この蛙、何を言われても平気、「蛙の面に水」ですし、何をやるにもまっくら、「蛙の行列」です。でも、ビデオに登場するタンパク質(HSP90)のように変異をため込み、時期が来ればそれを一気に開花させ

る、何かを秘めた蛙かもしれません。親は「蛙の頬被り」にならないようにと思っています。

ゲノム伝が完成して1年。こんなふうに関文系思考と理系思考を行ったり来たりさせて、文学的表現を科学的に解釈する遊びに興じています。

(かわばた・いくお/映像監督)

「ゲノム伝」を編集集中の筆者。

